

## 1 来訪者

その日はいろいろな出来事がおきていた。まず昼前に、撮影現場から失踪していた有名な映画俳優が死体で発見された。つづいて年末の交通渋滞の中で大規模な事故がたてつづけに発生し、深刻な交通の麻痺状態が首都圏をおおいつつあった。そして、午後の一時頃、強い地震が関東地方を襲い、それに拍車をかけた。

私はといえば、昼食から帰ってきて、事務所の床にガラス片が四散しているのを発見した。壁にかかっていた写真のパネルや絵画が落下し、鉢植えに額縁があたつて割れたようだ。

それが必要としていたきつかけとなり、私は年末の大そうじを始めてしまおうと決めた。継続中の仕事はあつたが、今は“待ち”の状態で、身動きがとれなかった。

そうじ機をかけている最中に電話が鳴った。出るまでに時間を要した。

ホースにつまづいて来客用の灰皿を倒してしまったのだ。週に一度、中味を捨てればいいほどしか吸い殻が溜まらない灰皿だった。

ひとりの依頼人の吸う煙草でこの灰皿がいっぱいになったことは、未だかつてない。

それでも自分の不手際を呪いながら、こぼれた吸い殻を拾い集めた。

ハイライトが二本、セブンスターが一本、フィルターにうつすらと口紅が残ったバージニアスリムが一本、だった。最後にこのソファで煙草を吸った女性は誰だっただろうと考えながら受話器をとった。

思いだせなかった。

「はい、緒方インヴェステイション」

「北村だよ。会うそうさ。今すぐ青山の本社に來い、と向こうはいってる」

「サシか」

思ったより早い“待ち”の解除に、緊張を覚え、私はいった。

「どうか。そこまでいえる立場じゃないからな。だがそう物騒ななりゆきにはならんと思うがね」

北村はのんびりとした口調でいった。仮りにその予想がちがったとしても、すまないと感じるような男ではない。

「わかった。青山は例のところだな」

「そうさ、急げよ」

そう告げて北村は電話を切った。左手に吸い殻を握りしめたまま、私はデスクの上に腰をおろした。

掘江みつきはこれで四日間、自宅に何の連絡もなく帰っていない。最後の消息は、これから会

う男の息子と六本木のデイスコを出ていく姿だった。堀江みつきの父親は与党の代議士で、みつきは父親が東京での住居としているマンションから女子大に通っている。

その父親に多額の政治献金をしているのがこれから会う男だった。不動産会社の社長と右翼団体の顧問を務めていて、背中にはきれいな絵が描かれているとの評判だ。

私は吸い殻を金属のクズ籠に払い落として立ちあがった。

バスルームでネクタイを締め直し、あげていたシャツの袖をおろした。コートは車の中に置きっぱなしだった。

私の事務所は六本木の七丁目、明治屋の裏を昔の竜土町りゅうどちよう方向におりていったビルの三階にある。五階建て、十室の小さなそのビルはファッションメーカーが二室、デザイン事務所が二室、広告制作プロダクションが三室、大家が二室を使っている。駐車場は、ビルの地下で道路からは一段低くなっている。

古いボルボのバンが普段の私の足だ。仕事では、幾台かの車をレンタル会社から借りて使うことが多い。

ボルボに乗りこみ、面倒くさげな唸り声に耳を傾けてやった。これを怠ると、途端にこいつはヘソを曲げる。

ぶつくさとぼやきながら、ボルボは重い腰をあげた。行先は、ほんの数キロしか離れていない青山三丁目のビルである。

ビル全体の持ち主が、これから会うことになっている外岡秀雄だった。ビルの地下にある有料

駐車場に車を入れ、一階の受付で名乗った。

紺の制服に白いリボンをあしらった制服を着た清楚な娘が、エレベーターで十一階の役員応接室まで上がるよう指示した。エレベーターで昇りながら、彼女が、社長の背中に描かれた絵のことを知っているだろうかと考えた。

知らないだろう。だが、どうということのない話だ。自分には関係ないと思うにちがいない。まさしくその通り、あなたには関係ない。ところで今夜、六本木の小さなビストロでうまい鴨でも食べないかね。そう、君と僕のふたりで。いや、別に考えこむことはない。酔ったら、私の事務所はすぐ近くだ。そこで休んでいけば——なに、下心は隠す気はない。本音だよ、本音でしか、私は生きないことにしている。

七階でエレベーターが止まり、扉が開いた。ゴマ塩頭を短く刈った、犀さいのような体つきの男が乗りこんできた。小さな眼は何の感情も混じえず、私を点検した。

身長一七四センチ、体重七十キロ、靴のサイズは二十六、ツイードのジャケットに自のシャツ、黒のコーデュロイパンツにネクタイをしている。時計は安物のデジタルで、靴もリーガル。パリりとタニノクリステイは年に二度くらいしかはかかない。注意深く観察すれば左頬の下、顎の少し上にある傷跡に気づくだろう。カッターナイフで切られたあとだ。裸になれば、あとふたつ傷跡を見つげられる。

森 エレベーターが停止した。十一階だった。扉が開くと、にこやかな笑みを浮かべた長身の男が立っていた。爽やかな育ちのよさをふりまいている。慶応幼稚舎出身は三十五歳までなら、たい

森  
ていその雰囲気を残しているものだ。

「お待ちしておりました。外岡の秘書で、中山と申します」

二十八、九、あるいは三十に手が届いているかもしれない。若く見えるタイプだ。国産車より外車、銀座よりも六本木が似合う男だ。

七階で乗ってきた男は無言で、歩きだした私たちのあとをついてきた。彼に六本木が似合うとは思えない。新宿歌舞伎町、池袋あたりがしつくりくる。玉虫色のスーツは、その彼には少し地味すぎると見たが、どうだろう。

中山の案内で、私は廊下の一番禺にある応接室に入った。七階の男も私と一緒に応接室に入った。中山にとっては、その男は透明人間だった。私に紹介することも、彼に頷くこともせず、私達をそこに残して立ち去った。

六畳ほどの、応接セットのみがおかれた部屋だった。ただし防音加工だけは完璧になされている。厚い壁の上に、防音材を重ねたようだ。中山が閉めていったドアも、まるで劇場のそのように分厚く重かった。喉がはり裂けるほど叫んでも、廊下では囁ささやきでいどにしか聞こえないだろう。

外岡産業の役員応接室がすべてこういう造りになっているとは思えない。ここは特別応接室と考えた方がよさそうだった。

壁には絵が一枚かかっていた。モジリアニのようだが、模写のように見えた。私は絵に近寄り、つぶさに検討した。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。